

令和7年度
北秋田市読書感想文・読書感想画
コンクール作品集

読書のあとで



読書のあとで

「表紙」題字 滑川道夫先生

昭和初期の教育家。一九〇六年生れ。秋田師範学校卒。
児童文学と学校図書館の普及に尽くした。

絵

綴子小学校 一年 成田陽斗

令和7年度北秋田市読書感想画コンクール

特選 「ライオンのカラフルなせかい」

書名 空とぶライオン

著者名 佐野 洋子

もくじ

発刊によせて

北秋田市教育長

佐藤 昭洋

4

読書感想画

☆幼稚園・保育園の部

〈特選〉わたしのおしろであそびましょう！

前田 保育園

佐藤 彩

5

☆小学校の部

〈特選〉ライオンのカラフルなせかい

綴子小学校 一年

成田 陽斗

7

講評

11

読書感想文

☆小学3年生の部

〈特選〉しっぱいにかんぱい！

綴子小学校 三年

佐藤 カンナ

13

〈入選〉ぼくがまもる

米内沢小学校 三年

田崎 陽也

14

おぼっちが教えてくれたこと

鷹巣小学校 三年

成田 乙葉

15

☆小学4年生の部

〈特選〉ぼくが知らなかったゴミの話

鷹巣小学校 四年

三浦 歩夢

16

〈入選〉水族館の飼育員さんはすごい！

阿仁学園 四年

片岡 恵愛

17

みんななかよく……………	米内沢小学校	四年	近藤彩蓮	18
勇気とやさしさのピザ……………	綴子小学校	四年	米倉道親	19
☆小学5年生の部				
〈入選〉「クジラと海とぼく」を読んで……………	米内沢小学校	五年	羽場大耀	20
☆小学6年生の部				
〈入選〉少数派になる勇気……………	清鷹小学校	六年	中嶋真悠	21
☆中学校の部				
〈特選〉人を見つめたい……………	鷹巣中学校	一年	堀内希咲	22
〈入選〉「違い」が希望になる……………	鷹巣中学校	一年	佐藤あおい	23
よりよい人生を送ること……………	鷹巣中学校	三年	庄司心優	24
優しさの形……………	鷹巣中学校	一年	鈴木萌生	25
☆高校・一般の部				
〈特選〉「神さまを待っている」を読んで……………	北秋田市・鷹巣		成田洋子	27
〈入選〉君に伝えたいことがある……………	北秋田市・鷹巣		成田八千代	29
講評……………				31
令和7年度 北秋田市読書感想文コンクール入賞者一覧……………				34
令和7年度 北秋田市読書感想文コンクール入賞者一覧……………				35
応募された方々……………				36

審査の先生……………	〈読書感想文〉	庄司美穂子(米内沢小学校・審査委員長)	工藤美香(鷹巣小学校)
		大淵倫子(鷹巣東小学校)	田中芳明(綴子小学校)
		木村裕文(清鷹小学校)	武石陽子(米内沢小学校)
		津谷美穂子(合川小学校)	山田雅子(義務教育学校阿仁学園)
		佐藤守(鷹巣中学校)	青山竜也(秋田北鷹高等学校)
	〈読書感想画〉	嘉藤貴子(北秋田市教育委員会事務局学校教育課・審査委員長)	田森舞(北教育事務所)

……… 発刊によせて ……

「燈火（灯火）親しむべし」

北秋田市教育長 佐藤 昭洋

「読書の秋」といわれるこの時季は、全国の「読書週間」が開催され、第79回目となる今年度は、「こころとあたまの深呼吸。」という標語のもと、「文化の日」を中心とした10月27日から11月9日の期間に、全国で様々な取組が行われました。本県では、11月1日を「県民読書の日」として、10月11日から11月9日の期間で「秋田県読書フェスタ」を開催し、本市の8イベントを含む、県内各市町村で総計257のイベントが実施されました。

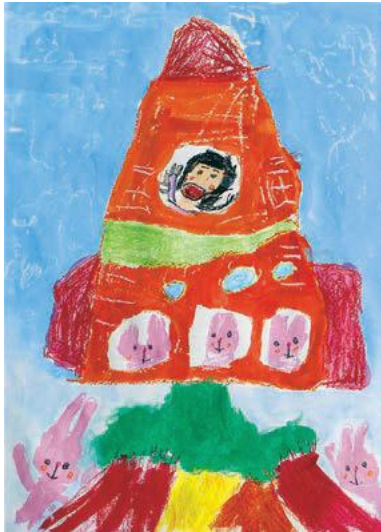
本市でもこの時季に、読書感想文・読書感想画コンクールを含めた「読書まつり」として実施してから4年目となり、今年も図書館内に隠れたぶつくまくんを探す「ぶつくまくんをさがせ！」など7イベントを開催しました。以前とは違った時季での開催となったにもかかわらず、昨年度までの4年間でたくさんの方の市民の皆様に参加いただき、すっかりこの時季の実施が定着してきたものと感じています。

さて令和7年度の北秋田市読書感想文・読書感想画コンクールには、小学校3年生以上対象の読書感想文に45点（小

学校36、中学校6、高校・一般3）、小学校2年生以下対象の読書感想画に314点（幼・保93、小221）の応募がありました。たくさんの方の児童生徒が読書に親しんでくれたことを思うと、とてもうれしくなりました。本の世界に飛び込んだ自分を、画用紙いっぱい描いた作品は、見ていて楽しくなりました。特選となった読書感想文は、失敗体験やゴミ問題などの自分たちの生活に直接関わる問題や、友達との関係を通して自分自身の生き方を考えるなど、正面から向き合い深く考えている本市の子供たちの感性に驚きました。作品を応募してくれた市民の皆様、家庭で支えてくれたご家族の皆様、応募に当たり指導してくれた先生方、更には、審査していただいた審査委員の皆様、本当にありがとうございました。

ところで、なぜ「読書の秋」と言われるのでしょうか。調べてみたら、「燈火（灯火）親しむべし」という漢詩の一節から、「秋になると、涼しくなり、夜も長くなつて、燈火、つまり明かりの下で読書するのに適している」ということだと書かれた記事があり、その理由が分かりました。本冊子に掲載されている読書感想画や読書感想文は、北秋田市で生活している皆さんのドラマが、澄み渡る秋の夜空に輝く星のようにたくさん散りばめられている宝物です。この作品集を紐解き、皆さんの感じた世界を、皆さんと共に感じてみたいと思います。

《入選》



にんじろけつとにのつてしゅっぱーつ！
阿仁合保育園 上杉 茉白
『おおきなおおきなにんじん』刀根里衣／小学館

《特選》



わたしのおしろであそびましょう！
前田保育園 佐藤 彩
『ぐるんぱのようちえん』西内みなみ／福音館書店

《入選》



うみのなかにいてみたいな
米内沢保育園 齊藤 悠真
『にじいろのさかな』マークス・フィスター／講談社

《入選》



うわあ〜！ おっきいなあ〜
前田保育園 柳谷 奏汰
『おまえうまそうだな』宮西達也／ポプラ社

《佳作》



えきとうちゃく
鷹巣中央保育園 佐藤 蒼虎
『むしむしでんしゃ』内田麟太郎／童心社

《入選》



パパのうんてんみんなでおうえんしているよ
米内沢保育園 北林 佑翔
『おたすけこびと』なががわちひろ／徳間書店

《 佳 作 》



はなびたのしろう

南鷹巣保育園

兎澤

薫

『ようかいえんのなつまつり』
白土あつこ／ひさかたチャイルド

《 佳 作 》



そらをとびたいな！

綴子保育園 畠山 茉優

『めっきらもっきらどおんどん』
長谷川摂子／福音館書店

《 佳 作 》



ぼくのいえはうちゅうの110かいだて!!

阿仁合保育園

鈴木 柊也

『100かいだてのいえ』いわいとしお／偕成社

《 佳 作 》



こんちゅうだいすき

鷹巣東保育園 松尾 奏 壱

『とべバッタ』田島征三／偕成社

《 佳 作 》



うちからはたらくるまがたくさんみえたよ

米内沢保育園 安藤 一 真

『おやすみはたらくるまたち』
シェリー・ダスキー・リンカー／ひさかたチャイルド

《入選》



クリームソーダにはいったしろくまちゃん
阿仁学園 1年 細 貝 在
『あま〜いしろくま』柴田ケイコ／PHP研究所

《特選》



ライオンのカラフルなせかい
綴子小学校 1年 成 田 陽 斗
『空とぶライオン』佐野洋子／講談社

《入選》



チリンのおたんじょうびかい
清鷹小学校 1年 藤 嶋 桃 々
『チリンのすず』やなせたかし／フレーベル館

《入選》



あさがおとあそぼう
米内沢小学校 1年 吉 田 琥 翔
『あさがお』荒井真紀／金の星社

《佳作》



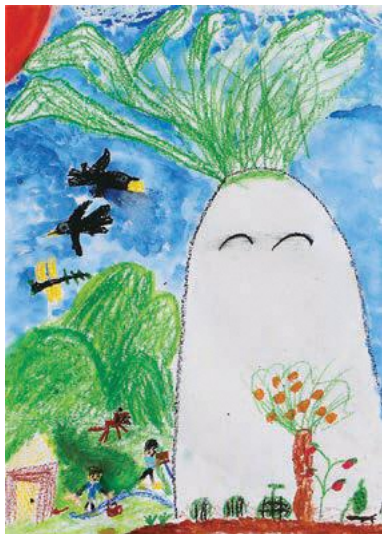
あさがおとわたし
米内沢小学校 1年 庄 司 悠
『あさがお』荒井真紀／金の星社

《入選》



ふしぎなもりにあるおかしのいえ
鷹巣小学校 1年 松 橋 零
『ヘンゼルとグレーテル』
グリム・作 中脇初枝・文／ポプラ社

《 佳 作 》



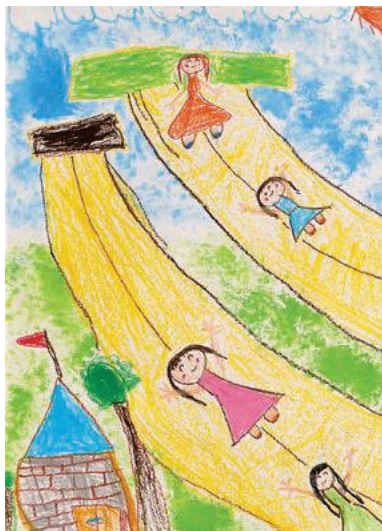
きよだい だいこんの むら
鷹巣小学校 1年 小塚 響斗
『だいこんどのむかし』渡辺節子／ほるぷ出版

《 佳 作 》



おたんじょうびパーティー
清鷹小学校 1年 福原 朱織
『さよならジャンボ』
やなせたかし／フレーベル館

《 佳 作 》



ながあいバナナのすべりだいであそぼう
合川小学校 1年 吉田 唯亜
『なんげえはなしっこしかへがな』北彰介／銀河社

《 佳 作 》



やどかりのパーティー
鷹巣小学校 1年 工藤 優月
『やどかりの おひっこし』
エリック＝カール／偕成社

小学校2年生の部

《入選》



魚たちとあそんだよ
鷹巣小学校 2年 近藤 心来
『ほしがりのクジラ』
レイチェル・フライト／トゥーヴァーシングズ

《入選》



ぼうし屋さんから かえってきたよ
清鷹小学校 2年 石川 心絆
『ミリーの すてきなぼうし』
きたむらさとし／B.L出版

《佳作》



やさいがいっぱい おいしいごはん
鷹巣東小学校 2年 赤石 湊真
『よるのやおやさん』穂高順也／文溪堂

《佳作》



にぎやかな海の中
米内沢小学校 2年 若松 詠樹
『みんないきてる みんなでいきてる！』
エリック・カール 絵 くどうなおこ 詩／偕成社

《佳作》



3人で楽しもう
鷹巣小学校 2年 コリガン 琉生
『ともだち』リンダ・サラ／ひさかたチャイルド

《佳作》



ぼうし屋さんから かえってきたわくわくのみんな
清鷹小学校 2年 西村 藍心
『ミリーの すてきなぼうし』
きたむらさとし／B.L出版

《 佳作 》



みんなの大きな木
鷹巣小学校 2年 水戸 帆華
『おおきな きがほしい』佐藤さとる／偕成社

《 佳作 》



みんなであそぼう
鷹巣小学校 2年 佐藤 心 陽
『ほしがりやのクジラ』
レイチェル・ブライト／トゥーヴァージンズ

《 佳作 》



新しい家ができたよ
合川小学校 2年 石田 惺 羅
『やどかりのおひっこし』
エリック＝カール／偕成社

読書感想画講評

今年は、保育園・認定こども園から93点、小学校1年生が113点、2年生が108点、あわせて314点の作品がよせられました。たくさんのご応募、ありがとうございました。

絵本の中の熊さんは、のんびり、おっとりとかわいらしいですが、現実の熊さんはそうはいかず、食べ物を求めて暴れ回っています。

実りの秋、熊さんは冬に備えておなかいっぱい、人間の子どもたちは心も体も豊かに健やかに、生き物みんながともに仲良く幸せに暮らせるといいのですけどね。

審査は例年通り、二人の審査員が相談しながら、それぞれの年齢に応じた表現が、子どもの感動とうまく調和している作品を中心に選んでいます。

多くの応募作品の中から受賞された皆さん、本当におめでとうございます。
選んだのは、次のような作品です。

○描きたいことが伝わってくる。

いろいろな小さな虫がたくさん描いてあれば、虫が大好きなんだなあとわかります。紙いっぱいに大きくくじらが描いてあれば、くじらの大きさにびっくりしたんだなあとわかります。描きたいものやことを思いっきり描きましょう。

○お話の中に入り込んだ自分の気持ちをよく表している。

楽しい、うれしい、わくわくしている、はりきっている、そんな気持ちが顔の表情や体の動きに表されていると絵が生き生きとして見えます。

○きれいでこちよい色で描いている。

絵の具を使うときは、いきなりたくさんの色を混ぜてしまうにごってしまいます。色を重ねすぎたときもにごってしまいます。近くの色同士を混ぜる、濃い強い色は少しずつ混ぜるなどの工夫をしてみましょう。渋い色や深みのある色にごった色は違うのです。

○表し方に自分なりの工夫がある。

色選び、指や筆の使い方、技法を使ってみるなど表し方にはいろいろな方法があります。自分の描きたいものやことをすてきに表すためにいろいろなことをためてみましょう。

○年齢にあった表す力がついている。

年長さん、一年生、二年生では表現力が違うのがあたりまえです。それぞれの年齢にあった描材や技法を使えるようにしたいものです。大人のような表現をする必要はありません。

何よりも大切なのは、描きたい気持ちがうまれること、もっと描きたいという楽しさがあることです。子どもたちが、本を読むこと、絵を描くことをずっと好きでありますように。

北秋田市教育委員会学校教育課	嘉 藤 貴 子
秋田県教育庁北教育事務所指導主事	田 森 舞

小学3年生の部

〈特 選〉

しっばいにかんぱい！

綴子小学校 三年 佐藤 カナ

「かんぱい」は、おいわいすること。でも、この本のタイトルは「しっばいにかんぱい」。しっばいしたときにかんぱいをしてもいいのかな？と思いました。

わたしは、時々しっばいをしてしまうことがあります。そんな時、しっばいをなかなかみとめられなくて、下を向いていました。学校の図書室でこの本のタイトルを見て、読んでみたくなりました。

主人公の加奈は、一年生から、ずっとリレーのせんしゅに選ばれていました。でも、運動会のリレーで、しっばいしてしまい、おちこんでしまいます。そんな時、おじいちゃんから電話がかかってきて、いとこたちとお昼ごはんを食べることになります。

そこで、みんなが自分のしっばいしたことを話し始めたのです。だれでもしっばいすることがあって、みんなしっばいしたら気持ち切りかえて、「かんぱい」と言っていました。でも、心の中では、「次はしっばいしないようにがんばろう。もう一どチャレンジしよう」と心に言い聞かせていました。

おじさんやおばさんが、しっばいのお話がおわった後、だれの時も「かんぱーい」と言っていたところがいいなと思いました。

この本を読んで、この世の中は、かんぺきな人はいないから、

しっばいしてもすぐにあきらめるのではなく、しっばいしても、もう一どチャレンジする心が大切だと思いました。

わたしは今、学きゆういいんをやっています。二・三年生が同じ教室で勉強をしていて、じゅぎょう中みんなに声をかけなくてはいけなことがあるけれど、うまくつたわらないことがあります。そんな時、もう声をかけるのがいやだなと思うことがあります。でも、わたしの声を聞いてくれる人もいます。これから、うまくいかなることがあるかもしれないけれど、あきらめないで、みんなをまとめていけるようにがんばりたいです。

主人公の加奈におじいちゃんは、

「しっばいをだいじにして、大きくなってくれよ。」

とつたえていました。わたしもしっばいを大事にしていきたいと思います。

だって、「しっばいは、せいこうのもと」だから。

「しっばいにかんぱーい！」

（『しっばいにかんぱい！』宮川ひろ／童心社）

〈入選〉

ぼくがまもる

米内沢小学校 三年 田崎陽也

ぼくは、「さん上！ヌンチャクゴリラ」という本を読みました。表紙のゴリラがヌンチャクを持っていたり、うちゅう人みたいな人がいたりして、どんなおもしろいお話なのかとワクワクしたからです。

この本は、小学校五年生のような男の子が主人公の物語です。ある日、ようじろうのお父さんは、うちゅう人が作ったゴリラバナナを食べて、ゴリラになってしまいました。ゴリラバナナで、人間をゴリラにしてみようとするうちゅう人をうちゅうに帰すために、ようじろうが、お父さんとうちゅうじいさんといっしょにたたかうというお話です。

ぼくがこの本を読んで一番心にのこったところは、ようじろうの友だちがゴリラになってしまったところです。ずっとゴリラのままだったらどうしよう、とドキドキしました。もし、自分の友だちがゴリラになってしまったら、すごいやです。ようじろうの友だちは、さい後は人間にもどることができました。それは、ようじろうの友だちのことをとても大切にしていって、まもりたいと思っていたからだと思いました。

ようじろうが言ったダジャレで、うちゅう人のニョルニョルゾたい長が、大よろこびしているところはおもしろかったです。ぼくも読みながらちよっとだけわらってしまいました。そのダジャレのおかげで、ようじろうの友だちは人間にもどれました。わら

いの力はすごいと思いました。ぼくも、まねをしてダジャレを考えたので、お父さんとお母さんの前で、

「アルミカンの上に、あるミカン。」

と言ってみました。お母さんがわらってくれてうれしかったです。うちゅう人をうちゅうへ帰すため、けいさつかんのお父さんが考えた、ヌンチャクをまわしてうちゅう人を空へとばす方ほうが「ヌンチャクタイフーン」です。とてもかっこいいので、ぼくもまねしてみたいと思いました。ぼくは野球部で、いつもすぶりをしたりバッティングの練習をしたりしているので、バットをふるように力強くふってみました。ぼくにもヌンチャクタイフーンができるような気がしてきました。

もし、ぼくがこの本の主人公だったら、野球のバッティングを何回も練習するように、ヌンチャクもがんばって練習して、ぼくがヌンチャクタイフーンでうちゅう人を空にとばしたいです。ようじろうやようじろうのお父さんが、ゴリラになった人をぜったいに助けたいと思ったように、ぼくも大事な家ぞくや友だちをぜったいに助けたいです。大事な家ぞくや友だちがこまっているときに、ぼくがまもってあげられるように、心も体も強くなりたいたいと思いました。

（『参上！ヌンチャクゴリラ』川之上英子・健／岩崎書店）

〈入選〉

おばつちが教えてくれたこと

鷹巣小学校 三年 成 田 乙 葉

おばつちと私は、にているところがほとんどありません。私は病気ではないので、入院もしていません。だれかのおばさんでもないし、お姉さんでもありません。それに、明るく元気なおばつちとは、考えることもちがいます。だから、おばつちの行動で、すぐには理かいできないことがたくさんありました。

一番ふしぎだったのは、「くるしいよう!」「死にたくない!」とさけんだ後に、ブイサインをしたことです。私がブイサインをするのは、写真のときの「ピース」だけなので、さいしょは意味が分かりませんでした。でも、何度もページを行ったり来たりして考えているうちに、おばつちがママつちを楽にするためにえんぎをしていたことに気がつきました。だからきつと、このときのブイサインは、メイに「大じようぶ、これは作せんだよ」とつたえたかったのだと思います。病気の自分のことより、まわりの人のことを考えているおばつちは、強くてやさしい人だなあ。だんだんそんけいの気持ちになりました。

やっぱ私は、おばつちみたいにはなれそうにないな。そう思いながら読み進めていましたが、私にも一つだけ、おばつちとにているところがありました。それは、少しくらい具合が悪くても、がまんをするところです。

おばつちは、病気で苦しいはずなのに、いつも明るく元気にふるまっていました。その理由が、私には分かります。きつと、大

すきなママつちやメイに心配をかけたくなかったからです。相手を大事に思えば思うほど、本当のことが言えなくなることもあるのだと、この本を読んで初めて気がつきました。

でも、それって本当にいいことなのかな。相手はうれしいのかな。私は、立場をかえて考えてみました。私がママつちやメイだったら、苦しいのをがまんしてわらっているおばつちを見るよりは、いっしょに苦しんだり、はげましたりしてあげたいです。その方が、「本当の家族」という気がします。家族に心配をかけないようにする思いやりも大切だけれど、家族だからこそ心配し合うことも大切なのだと、この物語は教えてくれました。

おばつちは、最後にもう一度ブイサインをしました。ママつちにもうすぐ赤ちゃんが生まれるので、「おばつち二回目」という意味だそうです。病気でできないことがたくさんあるけれど、その中でも幸せや楽しみを見つけて生きていこうとしているおばつちは、やっぱりすごいなあと思います。でも、もしおばつちに会えたなら、ときには「くるしいよう!」「死にたくない!」ってさけんでもいいんだよ、とつたえたいです。

私も今はなやみはないけれど、これから大きなかべにつき当たるかもしれません。そのときは、家族に相談して、たくさん心配してもらいたいです。その中で、自分にできることを見つけて、進んでいこうと思います。

（『おばつちのブイサイン』後藤みわこ／くもん出版）

〈特 選〉

ぼくが知らなかったゴミの話

鷹巣小学校 四年 三 浦 歩 夢

学校の社会科見学で、リサイクルセンターへ行くのをぼくはとても楽しみにしていた。しかし、体調が悪くその日は学校を休んでしまい、社会科見学へ行けなかった。そんな時に図書館で「すごいゴミのはなし」という本を見つけ、読んでみることにした。

この本には、ゴミ清そう員の仕事についてやゴミを集める時に感じていること、ゴミを分別して捨てることの大切さ、そしてゴミに関する問題についてとても分かりやすく書かれていた。清そう員の仕事は清そう車でたくさんさんのゴミを、一日六回も清そう工場へ運んでいるそうだ。清そう車一台に、ゴミをパンパンにつめたらアジアゾウのメスと同じになるそうなので、毎日たくさんさんのゴミが捨てられていることが分かる。ぼくはゴミをなるべくへらすことが必要だと感じた。

また、この本を読んで初めて知ったことは日本は中国とアメリカに続いて世界で三番目に食べ物を捨てている国だということだ。この本には、くさって食べられなくなったものだけではなく、まだ食べられるものもたくさん捨てられてしまっていることが書かれていた。ぼくが、お母さんと一緒にスーパーへ買い物に行くと、値引きシールのついたお肉を買う時がある。安いから買っているのだとぼくは思っていたが、それは食品ロスをへらすために、大

切なことをしているのだと気付いた。

そして、ぼくがこの本を読んでおどろいたことは、このままの量のゴミを燃やし続けると、およそ二十年后にはゴミのうめ立て地がなくなるとのことだ。清そう工場で燃やされたゴミは、元の大きさの二十分の一の量の灰になり最終処分場に集められるそう。元の量よりへるとはいえ、このまま同じ量のゴミを燃やし続けると、ぼくが大人になるころには最終処分場が灰でいっぱいになり、ゴミが捨てられなくなるようだ。そしてそうならないためのかい決方法がまだ考えられていないことを知り、ぼくはしょう来、ゴミはどうなってしまうのだろうとこわくなった。

ぼくは、まだかい決方法が考えられていないのなら、ゴミを少なくするために、今自分ができることをしようと思った。例えば学校で給食の時間が終わるとみんなの残した給食がたくさん食缶へ集められている。ぼくはなるべく残さずに食べて食品ロスをへらすように心がけたい。また、ゴミを捨てる前に、それがリサイクルできるのかどうかをたしかめて、ゴミの分別をしたいと思った。

ぼくができることは、日本の全てのゴミの量に対して、ほんの小さなことかもしれないが、ほんの小さなことでも続けることで、何かが変わっていくかもしれない。しょう来の日本でゴミの問題がかい決されることを願って、今、ぼくがゴミをへらすためにできることをせいっぱいやっていききたい。

『すごいゴミのはなし』、ゴミ清掃員、10年間やってみた。』

滝沢秀一／学研出版

〈入選〉

水族館の飼育員さんはすごい！

義務教育学校阿仁学園 四年 片岡 恵 愛

私は、水族館が大好きです。いろいろな動物に会えるし、見ていてとてもいやされるからです。今年の夏休みに家族で行った名古屋でも、水族館に行ってきました。

私は、家で犬を二ひきかっています。とてもかわいいけれど、遊びのつもりでかんだり、ひつかいたりしてることがよくあります。やんちゃすぎて、お世話につかれたなと思うこともあります。でも、名古屋の水族館で見た飼育員さんたちは、いつ見てもここにこしていました。あんなに笑顔でいられるなんて、きっと楽しいことばかりなのだろうな、どんな仕事をしているのだろうと気になりました。そこで、この本を読んでみることにしました。本を読み進めていくと、海の動物たちの持ちようや生たい、かわいところがたくさん書かれていました。でも、それだけではありませんでした。

私がこの本を読んで一番感じたのは、飼育員さんの仕事の大変さです。水族館での主な仕事は、動物たちへのえさやりとそうじ、ショーの練習、それから体調管理だそうです。犬のお世話と似ているので、だいたい予想通りでしたが、その中でとてもおどろいたことがあります。それは、えさの量です。例えば、イルカは毎日一頭で十五、二十キログラムのえさを食べるそうです。よくテレビでは、芸人やスポーツ選手が、器からはみ出るほど大盛りの料理を食べているのを見かけます。それでも、一人三キログラム

くらいなので、イルカの食べる量がいかに多いかがわかります。ということは、飼育員さんは毎日二十五キログラムの魚をさばっていることになります。水族館にいる他の動物たちのえさも合わせて毎日用意するなんて、想像できないくらい大変なのだろうと思いました。

また、動物たちも私たち人間と同じで、一人一人せいかがちがうことが分かりました。いたずら好きの子、おとなしい子、甘えんぼうの子。いろいろなタイプの動物がいるのが学校みたいだなと思いました。その中で一人一人に合う方法を考えてせっせしているのです。水族館で見る動物たちは、どの子も生き生きしています。きっと、大変な中がんばる飼育員さんの優しさが通じて、動物たちとの間にきずなができているのだと考えました。

動物たちのお世話は、私が思っていた以上に大変だと分かりました。でも、この本に登場する飼育員さんや名古屋で出会った飼育員さんは、みんな笑顔でした。どうしてこんなに笑顔でいられるのだろうと考えました。それはきっと、動物たちのことが大好きだからだと思います。本当は苦労することも多いはずなのに、それをお客さんには感じさせない笑顔が、とてもすてきなと思いました。しょう来私も飼育員の仕事をやってみたいと感じました。私の家の犬も、二ひきともせいかが全くちがいます。大変なこともあるけれど、これからは私も飼育員になったつもりで、笑顔をたやさないでせっせしたいと思います。

〔飼育員さんひみつおしえて！ みんなわくわく水族館

海の動物いっぱい編〕竹嶋徹夫 監修 池田菜津美 文

／新日本出版社）

〈入選〉

みんななかよく

米内沢小学校 四年 近藤彩蓮

わたしは「それでいい」という本を読みました。この本を選んだのは、何が「それでいい」のか気になったからです。

この本は、絵をかくのが大好きなきつねと心のやさしいうさぎが主人公の物語です。わたしが、この本を読んで心にのこったところは、うさぎがきつねにやさしく声をかけた場面です。きつねは、うさぎに声をかけられるまで、上手な絵をかくことができるか、不安でした。しかし、声をかけられたことで、やる気を出し、みんながおどろくような絵を完成させました。このときのきつねは「やったぞ！」というよろこびの気もちでいっぱいだったと思います。また、声をかけたうさぎもいっしょによりこんでいて、うさぎのやさしさに心をうたれました。

この本を読んで、自分もうさぎのようにやさしく人にせつしたいと思いました。わたしは、なかのよい友だちや下級生にやさしくせつすることができず、姉にはやさしくせつすることができないでいます。その理由を考えると、姉に対して、ゆずりたくない気もちや負けたくないという気もちがあるからだと思います。ひどいことを言った後の姉の悲しい顔を見ると、わたしは後かいの気もちで心が苦しくなります。「次はやらない。」と心に決めていても、やはり、姉をたたいたり、ひどいことを言ったりしてしまいます。わたしは、これから「やさしくしたいのに、やさしくできない」という気もちと戦い、姉にやさしくできるようにな

りたいと思います。

わたしはこの本を読んで気づいたことがあります。それは、みんなが思いやりをもっていれば、けんかすることなく、生活することができるということです。お互いの意見が食い違い、イライラをぶつけ合うと、けんかはエスカレートします。どちらかが、相手のことを考え、ゆずったり、言いたいことをがまんしたりすれば、相手もそれに気づき思いやりをもつてくれるはずです。そうすると、けんかはなくなります。わたしは、けんかにならないように、先に相手に思いやりをもつてせつしていきたいと思います。

最後に、わたしはこの本を読んで、結局何が「それでいい」のか分かりませんでした。夏休みが終わった後、先生に聞くと「自分が好きなことは、うまくいっても、うまくいなくても、楽しむことができれば、『それでいい』ということではないか。」と教えてくれました。わたしは、図画工作科の絵をかく時間に、なっとくする作品ができなくて、絵をかくという好きなことを楽しめずに、終わってしまったことがあります。しかし、この本を読んだり、先生の話を聞いたりして、「楽しむことが一番だ。」という大切なことに気づきました。これからは、「楽しめばそれでいい」という、前向きな気もちをもって、生活していきたいと思っています。そして、好きなことを楽しめていない友だちにこのことを伝えていきたいと思っています。

『それでいい!』 礒みゆき／ポプラ社

〈入選〉

勇気とやさしさのビザ

綴子小学校 四年 米倉道親

ぼくが「六千人の命を救った外交官杉原千畝」の本を読んでみようと思ったのは、図書室でこの本を見つけて、主人公の杉原千畝さんはどんなことをした人なのかと気になったからです。

杉原千畝さんは、今から八十年くらい前にヨーロッパにあるリトアニアという国で働いていた日本人です。リトアニアでは、日本の代表として、外国の人とお話をする仕事をしていました。

当時のヨーロッパでは戦争が始まっていて、ユダヤ人をいじめたり差別したりする、ナチスという人たちがいました。ナチスは自分たちが一番えらいのだとまちがったことを信じていて、昔から神様を大切にしてきたユダヤ人をきらっていたのです。そのため、たくさんのユダヤ人が自分たちの国にすることができなくなっていました。逃げようとしていました。逃げるためには、「ビザ」という特別な紙が必要でした。ビザは、他の国に入ることをゆるしてもらうための証明書のようなもので、ないと入国することができなかつたからです。

千畝さんのところに、たくさんのユダヤ人たちが「ビザをください！」とお願いしにきました。しかし、当時の日本はナチスが治めるドイツと国どうしで協力し合っていたので、ナチスのやり方に反対するようなことはできませんでした。日本せい府は、千畝さんに「ビザを出してはいけません」と命令しました。もし、千畝さんが命令にさからってビザを出したら、お仕事を辞めさせ

られてしまうかもしれません。しかし、ビザを出さなかったら目の前のユダヤ人たちは死んでしまうかもしれません。ユダヤ人たちの悲しそうな顔を見て、千畝さんはとても悩みました。悩んだ末に、千畝さんは、「困っている人を助けたい！」と思い、一人でビザを書き始めたのです。

この本を読んで、ぼくは、胸が熱くなりました。たくさん命を助けるために、千畝さんがたった一人で勇気を出して行動した姿が本当にすごいと思ったからです。千畝さんは手が痛くなるほどたくさんのビザを書きました。電車に乗りながら、窓から身を乗り出しても書き続けたそうです。そのビザのおかげで、六千人の命が助かったといえます。せい府に言われたとおりにしたら楽だったはずなのに、困っている人たちのために、自分の気持ちに正直に行動した千畝さんのやさしさにも感動しました。

ぼくも、千畝さんのように、まわりの人を大切にできる人になりたいです。例えば、友達が悲しそうにしていたらそっと声をかけてあげたり、一人でいる子がいたら進んで、「いっしょに遊ぼうよ」と誘ってあげたりしたいです。勇気とやさしさがあれば、だれかを助けて笑顔にすることができるとこの本が教えてくれたので、いつも「勇気とやさしさ」をもって生活したいと思います。

『六千人の命を救った外交官 杉原千畝』

渡辺勝正・あべさより／小学館

〈入選〉

「クジラと海とぼく」を読んで

米内沢小学校 五年 羽場 大耀

この本を取ったときに、表紙に大きなクジラが描かれていました。筆者の水口さんと海やクジラと、どんなつながりがあるのかを知りたくて読もうと思いました。

水口博也さんは、水中カメラマンです。母親の実家が徳島県の実家の町だったので、幼い頃からよく貝やカニなどの生き物を探して遊んでいました。小学生になると、水中メガネをつけて川や海の中をのぞき込むようになります。次第に水中をのぞき込む楽しさを覚えるのでした。泳ぎがあまり上手ではなかったのですが、海に行ったときには浮き輪につかまりながら海の中をのぞいていました。泳ぎが上手になると、足ヒレやスノーケルを付けて海中探検を楽しむようになります。また、本や写真を見ながら海の生き物も勉強し始めるのでした。そこで、水中でイルカやクジラの写真を撮ってみたいのです。

ぼくは、水口さんが海の中でクジラと出会う場面を読んだ時に、クジラはとても大きくて力強いのに、なぜか安心できる動物だと思いました。また、あの広い海の中を泳いでいるので、ぼくたち人間よりはるかにいろいろな世界を知っているような感じがしました。

水口さんとクジラが海の中で一緒に泳ぐところがありますが、

二人は言葉を交わすことはできませんが、不思議と心が通じ合っているように思いました。クジラからすると敵ではないという安心感があるのだと思います。水口さんに攻撃をせず、なかよく泳いでいる場面はとても感動しました。

海は、おだやかで優しく見える時もありますが、大きな音を立てなから波が高くなると怖さもあります。そんな広い海の中には、たくさん生き物が生活しています。海の中の生き物は、海の中で生きていくために必死になつて身を守りながらがんばっているにちがいないと思います。自然の中で生きるためには、厳しい条件を何度もクリアしていかなければならないからです。人間は、果たしてあの海の中で生きていけるのだろうかと思いは考えてしまいました。

ぼくが、この本を読みながら考えたのは、海の生き物が絶滅してしまつたらどうなるのだろうかということです。砂浜に行くとたくさんゴミが捨てられているのを見かけます。もしかすると、川や海にいろいろな物を捨てている人がいるのかもしれない。そういう積み重ねが自然を破壊し海の生き物の命まで奪ってしまうことになる。必死に生きていこうとする海の生き物のために、自分ができることは何かなともう一度考えてみたくなりました。水口さんと一緒に泳いだクジラは、海を大事にする、自然を大事にしてくれている人間がいることに、もしかすると気づいていたのかもしれない。この本を読んで、自然は人間の力でしっかり守っていかなければならないことを学びました。

（『クジラと海とぼく』水口博也／アリス館）

〈入選〉

少数派になる勇氣

清鷹小学校 六年 中嶋 真悠

みんなは思ったことを何でも話しているのかな。一人一人の意見が大切と言うけど、他の人たちが意見をもちということとは、少数派になるということだ。少数派は少し心細い気持ちになる。正直にいうと、ぼくは自分がどちらかと言えば少数派だと思う時は、つい多数派に話を合わせてしまうことがある。自分にうそをついている感じはするんだ。だけど、がんばって自分の気持ちを守るより、不安定さとか圧力を感じなくてすむ多数派の心地良さを選ぶたい時もあるんだ。それでも、少数派の考えを聞いて、なるほどって思うこともあるし、その意見を尊重してあげたい気持ちにもなる。そして最後は、みんなの雰囲気が悪くならないように、うまくまとまればいいなと思う。けれどこの本を読んで人たちが意見をもち、それを伝えることが人類の発展につながってきたことを知った。つまり少数派は大切で、必要とされる存在なんだ。

人類は、それぞれの場所で協力して生活をするようになって、お互いの考え方を結びつけるために、神話や宗教といった、みんなが信じる物語を語るようになる。そして、言語や文化、宗教が違ふ人間が、何かの理由で国を出て出会い、また新しい文化が生まれた。それは良い出会いとはならず、争いに変わる時もある。

信じるものがちがうと、どうしても一つの考えにまとまらないからだ。そんな悲しい歴史もあるけれど、考えのちがう人間同士の出会いは、様々な人類の発展へと結びついた。しかし、新しい出会いには、きつとためらいや迷いがあつたはずだ。それまで行われてきたことを多数派とすれば、新しいことを受け入れるのは、きつと少数派だったにちがいない。少数派の長い年月にわたる勇氣が作りあげたことだとも言えると思った。

前に、授業中に先生がぼくの意見を取りあげてくれて、みんなの前で発表したことがある。自分の考えを言うのは、とても緊張する。正しいのか、まちがっているのか、みんながどう思うのか、でも先生から、

「あなたの考えが、みんなの考えを深めてくれたよ。ありがとう。」
 といつてもらつて、とてもうれしかった。もしかしたら、ぼくが自ら少数派になる勇氣をもてば、みんなの力になれる機会が増えるのかもしれない。

今は多様性を受け入れることが大切だと言われている。ぼくはそれを、他の人と違ふ人を守るため、思いやるために受け入れようという意味だと考えていた。ずつと少数派を弱い立場の人と思つていたのだ。けれどこの本を読んで、支持者が少なくても声をあげる人がいるから、現状がより良くなったり、問題が解決したりするようになるのだと思つた。今ある状況を変えてきたのは、いつだつて少数派の努力だったのだ。

ぼくは、自分の意見が大切なことだと信じた時は、周りの人や未来の人のために、しっかりと伝えていける人になりたい。

(『人類の物語 Unstoppable Us 世界はちがう人どうしでできている』ユヴァル・ノア・ハラリ／河出書房新社)

中学校の部

〈特 選〉

人を見つめたい

鷹巣中学校 一年 堀 内 希 咲

自分では気付けない自分の良さがある。私が憧れるあの子には、あの子にしか分からない悩みがある。この物語を通して、新しい視点で自分を見つめることができた。

物語の主人公田中ひとみは、周りを気にして本音を話せずに過ごしていた。そんなひとみは、自分の意思をハッキリ言う学校一の美少女柳田しずかに憧れていた。ある夜、塾からの帰り、偶然しずかと出会った。そこにクラスの嫌われ者の押川さんが乗る車が突っ込んできて、ひとみ、しずか、押川さんの三人は入れ替わってしまったのである。

なぜしずかは嫌われ者の押川さんになりたかったのか。なぜ押川さんはこんなわたしになりたかったのか。憧れのしずかになったとき、いろいろな人が優しくしてくれた。たくさん話しかけてくれた。想像どおりの幸せな生活。けれど、多くの人に気を遣い遣われ、いつも疲れていた。続いてひとみは押川さんになった。みんなが嫌う押川さんである。でも、ひとみが気付かなかったたくさんの良さがあった。周りにどう思われるかばかり気にして、大切な人を傷つけていることにも気付いた。ひとみは、自分の姿では言えなかった本音を周りにしっかりと言い、最後にはあれほど嫌っていた押川さんを助けようとした。

私は最初、この子たちのように憧れのあの子と入れ替わったら、どれだけ楽しいだろうか、幸せだろうかと思っていた。しかし、物語が進むにつれて、あんな人気者のしずかでも悩んでいるんだ、あんなに嫌われて嫌がらせを受けている押川さんでも教室の隅で楽しんでいたんだ、と気付いた。新しい視点をもつことで、その人の悩みや楽しさ、良さがだんだん明らかになっていくように感じた。そして、物語が進むにつれ、だったら私はどうなんだろう、と考えるようになっていった。

中学校という新しい環境。最初は慣れるのが難しかった。それまで受け入れてもらっていた私。でも中学校に入って、自信があったことや得意なこと、好きなことを否定されたこともあった。もちろん受け入れてくれる人も大勢いた。様々な人と関わっていく中で、私が今まで気付いていなかった自分の良さや得意なことが見えてきた。

私は、私を受け入れてくれた友人たちに助けられ励まされ、勇気をもつことができた。では、その友人たちはどうなのだろうか。話をたくさん聞いてくれて、褒めてくれた友人たちに悩みはなかったのだろうか。だから、私は私を受け入れてくれた友人たちに、同じことがしたい。悩みを聞いたら助けられるかもしれない。力になれるかもしれない。

逆に、私を否定した人たちに対してはどうだろうか。自信があることや得意なこと、好きなことを否定されるのには納得できない。でも、その人たちから見る私は、自分が思っている私とは違うのかもしれない。否定の理由があるのかもしれない。そこで、その人たちの否定は否定だと思わないことにした。違う視点から見た私として受け取ろうと思う。私の気付かない私なのかもしれ

ないのだから。

だから私は、様々な視点から人と関わっていききたい。ひとみのように、その人の初めて見る一面が見られるかもしれないから。新しい気付きがあるかもしれないから。その気付きで、更に仲良くなれるかもしれないからだ。

私はこの物語から気付きを得た。人から見た自分は「私が思っている自分」とは違う。私が「自分はこうだ」と思っていることも、他の人の目には違って映る。自分が得意だと思っていることも、得意には見えないかもしれない。逆に苦手だと思っていたことが、他の人には得意そうに見えるかもしれない。そんな相手の視点も大切にしていきたいと思う。

人は、自分も相手の内面も簡単には理解できない。その人の本当の願いは、予想とかけ離れているかもしれない。だから、私は人をいろいろな視点から見つめ、深く関わり合いたい。自分と相手を理解していきたい。

『もしもわたしがあの子なら』ことさわみ／ポプラ社

〈入選〉

「違い」が希望になる

鷹巣中学校 一年 佐藤 あおい

人には、その人にしかない見方や考え方があある。一人一人「違い」がある。違いをもった人が集まって、一つの目標に向かうのが駅伝だ。私は駅伝が大好きだ。選手として駅伝を走ったことも

何度かある。そのときは、メンバーが一つの目標に向かってがんばるのは、当たり前だと思っていた。この本「あと少し、もう少し」を読むまではそう思っていた。

この本は図書室の本棚で見かけた。表紙には、ユニフォームを着て走る、中学生くらいの男子数人が描かれていた。たすきを手にして振り返っている人もいる。タイトルはどういう意味なのか。どんなときに誰が思った言葉なのか。私は本を手にとった。

市野中学校陸上部を毎年県大会に出場させていた顧問の先生が異動になり、代わりに頼りない先生が来た。部長の榊井は、中学最後の駅伝に向けて、同じ陸上部の設楽、俊介とともにメンバーを集め始める。内気な設楽、不良の大田、頼みを断れないお調子者のジロー、超然とした渡部、榊井に憧れる俊介。各区間六人の視点で物語は進んでいく。寄せ集めのバラバラな六人が県大会出場を目指し、あと少し、もう少しと、みんなと走るために全力でたすきをつなぐ。

人には、人の数だけものの見方や考え方があある。六人は本当にバラバラだった。ましてや県大会出場という目標を全員が最初からもっていたわけではない。それなのに、どうしても長く、みんなと走ろうと思ったのか。全力でたすきをつなぐと思ったのか。どうして彼らの心はつながったのか。ページをめくるたびに、六人の思いは重なり、深まっていった。私は物語にのめり込んでいった。

不良でやる気を感じられない大田。本当は自分や相手と向き合って戦おうとする強い気持ちと、繊細で敏感な心をもつ人だった。言いたいことをはっきり言い、みんなに嫌がられてしまいやすい渡部。実は人一倍優しく、他人に気配りができる人だった。

梶井はいつも前向きで、空気を読むことができ、メンバー集めでも部長として引つ張ってきた。しかし、自分の代で県大会出場の伝統を絶やしてはならないという重圧を、一人で背負っていた。同じ場面が六人の視点で描かれていたから、私は彼らの内面を知ることができた。

けれど、どうだろう。物語でも現実でも、相手の心の深いところ、相手が話してくれない限り分からない。それでも、六人の気持ちも目指すものも一つになったのは、六人がバラバラだったからだと思う。それぞれがそれぞれのやり方で相手を思い、考えた。その結果、すれ違いが起きることもあった。しかし、互いが寄り添い、相手を理解しようとしたから、心も目標も一つにできたのだ。

彼らを見て知った。当たり前だと思っていたことは、本当はとてつもなく価値のあることだった。それぞれが違う見方や考え方をもちからこそ、「希望」があると知った。私が経験した駅伝は、彼らほど複雑な事情が絡み合っていたわけではない。けれど、それぞれ不安を抱え、つらい練習メニューの中でくじけそうになった。それでも、心の一つにして目標を達成できたのは、物語の彼らと同じように、自分とは違う立場の人が寄り添い、励まし合ったからだと思う。これは駅伝に限らない。一緒に何かを成し遂げる時も一緒だ。つらく苦しいとき、自分とは違う人同士だから、手を取り合って明るい方へと導き合っていけるのだ。

私たちは、誰もが自分という一人の人間である。私とあなた、私と友達、みんな違う。だから、自分一人で乗り越えられない高い壁も、あらゆる視点から思いが集まることで、乗り越えられる。自分と全く違う考えの人がいて、意見がぶつかったとしても、自

分とは違う人なのだからしかたがない。そんなときは、相手の意見を否定するのではなく、話し合い、寄り添い、認め合うことが大切だ。これからは「違い」にこそ希望をもちたい。

（『あと少し、もう少し』瀬尾まいこ／新潮社）

〈入選〉

よりよい人生を送ること

鷹巣中学校 三年 庄 司 心 優

森絵都さんの「カラフル」を読んで、私は人間の弱さについて深く考えさせられました。

この物語は岡島大樹という少年が自分の命を絶ち、死後の世界で抽選に当たり他の少年大須藤幸太郎の体を借りて再び生きるチャンスを与えられるという不思議な設定です。最初はファンタジーのような設定に驚きましたが、物語を読み進むにつれて自身のこととして受けとめられるリアルな物語だと感じました。そして、大樹の姿を通じて生きることについて多くのことを学びました。

物語の冒頭、大樹は自ら命を絶ってしまいます。彼は学校でうまくいかず、家庭でも問題を抱えており自分が自信を持てずに孤独を感じていました。自分の存在に意味を見出せず、死を選んだ彼の気持ちは私にとってとてもリアルでした。誰しも一度は悩み苦しみを抱え、絶望に感じることがあると思います。私は大樹のよう

に生きる意味が分からないと感じたことはまだありませんが、自分に自信がもてないことはたくさんあります。私たちは生まれてからずっと他者に優しくしなさいと教えられ生きています。その一方で、不甲斐ない自分も認め自分に優しくしなさいと教えてくれることは少ないのではないかと感じます。他者は許せることも自分自身を許すことは難しいです。何でも器用にこなし、自分がかっこいいと思える姿に誰しも憧れていると思います。その気持ちが大きい分、不器用でかっこ悪い自分が出てきたとき、すぐく

自分はちっぽけな人間だと感じる人が多いです。自分と他者を比べ劣っていることになりがちで自己肯定感が下がります。それが積み重なり自分の存在価値に意義を見出せず自ら命を絶ってしまう人もいるのではないかと考えさせられました。駄目な自分も許し、命を大切に前に進んでいくことの重要性を痛感しました。私が特に印象にのこったのは幸太郎の母親との関係です。母親は息子の死を深く悲しみ、自分を責め続けています。大樹は最初その母親の苦しみを理解できませんでした。次第にその心情に共感し始めます。この過程を通じて、大樹は他人の痛みを理解し、自分を犠牲にしても他人を助けることの大切さを学びます。このシーンは私にとっても大きな学びでした。それは、自分の命でもそれは母親からもらった命で大きくなるにつれて周りの人達とも関わりが増え自分一人の命ではなくなるといことです。私たちも、他人の痛みや苦しみを理解しようとする姿勢が必要だと感じました。物語が進むにつれて大樹は自分の命の重さに気付いていきます。最初、大樹は生きる意味がないと感じていましたが幸太郎の体を借りて過ごすうちに命を大切にすべきだと心から思えるようになります。大樹は自分の命を大切にしなければならな

いと気付きます。彼は他人の命がどれだけ尊いものであるかを実感し自分の命をもっと大切にしようと決意します。私もこの部分を読んで命がどれだけ貴重なものなのか、そして生きていることがどれだけ素晴らしいことなのかを改めて感じました。普段は当たり前のように思ってしまう命ですが、それが無くなることの恐ろしさを知ること、私たちはもっと毎日を丁寧に生きるべきだと感じました。

「カラフル」を通じて私は生きるこの意味や命を大切にするこの重要性を深く考えさせられました。大樹が他人との関係を通じて成長し、命を大切にするようになる姿に私は強く感動しました。この本を読んで、日々の生活の中で当たり前に感じている命が、実は非常に重要であることに改めて感じました。これからは、どんなに小さいことでも感謝し命を大切にしながら毎日を過ごしていきたいと思えます。そして自分を受け入れ、他人を思いやることで、より良い人生を送ることができると信じています。

（『カラフル』森絵都／文藝春秋）

〈入選〉

優しさの形

鷹巣中学校 一年 鈴木 萌 生

私はこれまで、医師とは大勢の患者さんを効率よく診て、迷わず判断できる人だと思っていました。しかし、この作品に登場する諏訪野先生は、患者さんへの優しさを持ち、行動一つ一つが丁

寧な人でした。新米で自信がなく、迷いの多い人でしたが、自分にできることを見つけ、一つずつやり通していく姿がとても格好良く見えました。

特に感動したのは、先生が患者さんの話をよく聞き、最後まで寄り添う場面です。患者さんの言葉や仕草、事情の変化まで注意深く見て、それをカルテに細かく記録します。ただのメモではなく、この人をもっと理解したいという気持ちが込められていると感じました。このカルテを書くことこそが、諏訪野先生の「祈り」なのではないかと思いました。

手術をしたくない患者さんに対しても、先生は諦めず、何度も話を聞き、理解してもらえようと少しずつ歩み寄っていきます。その姿は私が思っていた医師像とは違い、人間らしく、温かいものでした。医師という職業は、知識や技術だけでなく、人の気持ちに寄り添う力も必要なのだと改めて感じました。

私は今の自分自身を振り返ってみました。私は、どうすればいいか考えることはあっても、実際に行動に移すのが苦手です。友達が困った表情をしているとき、心の中では「何かできることはないか」と思います。けれど、その場では声を掛けられないことが多いです。授業中の発表も、緊張してしまうので、なかなか手を挙げられません。

でも、諏訪野先生のように、今の自分にできることを探して実行するのは、私にもきつとできるはずです。例えば、部活動でうまくいかず落ち込んでいる仲間がいるとき、直接励ますのが難しければ、さりげなくそばに居たり、後で「一緒に練習しよう」と誘ったりする。そんな小さな行動が優しさにつながるのだと思いました。私はコツコツ取り組むタイプのようなので、大きなこと

はやれなくても、少しずつを積み重ねていけば、必ず誰かの力になれると思います。

また、この作品は大切なことを教えてくれました。人の話を素直に最後まで聞くこと。自信がなくても、自分にできることを探してやり通すこと。人と接するとき、話を聞いてあげたり、一緒に考えたりすることが優しさにつながることに。これらの教えは、日常生活でもすぐに生かせるものです。家族との会話でも、相手の話を途中で遮らずに最後まで聞く。友達が悩んでいるときに一緒に考えてみる。身近な場面で実践できる機会はたくさんあります。

私は更に、この作品を通して「優しさとは何か」を深く考えるようになりました。相手に親切にすることだけが優しさではない。その人の気持ちを理解しようとする姿勢や、相手の立場に立って考えることから、優しさは始まっていると思います。友達が悩んでいる、無理に励ますのではなく、そばにいて話を聞くだけでも、相手にとって大きな支えになるかもしれません。

そして、行動を起こすことの大切さも強く感じました。考えているだけでは何も変わらない。勇気を出して一歩踏み出すことで、自分自身も成長できるし、周囲の人にもよい影響を与えることができると思います。私はこれまで、失敗を恐れて行動をためらうことが多くありました。けれど、この作品を読んでからは、失敗してもいいからやってみようと思えるようになりました。

諏訪野先生が一人の患者さんに集中し、相談し、カルテを書き続け、最後まで寄り添ったように、私も身近な人たちを大切にしたいです。考えているだけでなく、勇気を出して行動を起こせるようになりたい。すぐに結果が出なくても、誰かの心に届くよう

な行動を続けていくことが、私の目指す優しさの形なのだと思います。その小さな積み重ねが、私なりの「祈り」になると信じています。

『祈りのカルテ』 知念実希人／KADOKAWA

高校・一般の部

〈特 選〉

「神さまを待っている」を読んで

成 田 洋 子

この本を読んで、一番印象に残っているのは「貧困というのは、お金がないことではない。頼れる人がいないことだ」という主人公水越愛の言葉だ。

未婚で、ずっと非正規雇用で働いている私は、自分の事を極貧であると思っていた。

しかし、実家に住み、親戚から米や野菜をもらっているのだから、貧困とまでは言えないのかもしれない。

水越愛は派遣切りにあい、家賃が払えなくなり、ネットカフェに寝泊まりするようになる。初めは工場などの日雇いバイトをするが、

「君、大学出てるんでしょ？ 卒業後は何してたの？ 大学出てるのに、バカなの？」

などと言われ、肉体労働のわりに低賃金である為、勧誘された出会い喫茶のバイトをするようになる。日雇いバイトに比べて高収入なので徐々にはまっていくが、職業差別が生じ、いつまでもこのような仕事をしてはいけなさと悩むようになる。

私は水越愛の気持ちがとてもよく分かる。私は今まで工場、清掃、飲食店など色々なバイトをしてきた。何度か

「鳳鳴高校出てるのに、なんでこんな所で働いているの？」

と言われた事がある。出会い喫茶の経験は無いが、クラブやスナックでのホステス、コンパニオンのバイトをした事もある。その時は私も職業差別が無かったとは言えない。私はお金がないから仕方なくこの仕事をしているだけだ。この業界に好きでいるわけではない。と強く思っていた。

しかしその一方で、自分の母と姉が、水商売を見下しているような会話をした時は、そういう仕事を一生懸命頑張っている人もいるのだから悪く言わないで欲しいとも思った。

水越愛は、窓の外をずっと見ていると、街を歩く人たちをうらやましいと思う以上に、死にたくなってくる。そんなことを考えてはいけないとわかっていても「お腹すいた」と感じるくらいの気軽さで「死にたい」と感じる。

私も全く同じだ。仕事がなかなか見つからない時、面接を受けても落ちてばかりの時、仕事をしていても辛い時、自分以外の人は全て順調のように見え、自分は何をしているのだろう。どうしてこんな人生になってしまったんだろう。とみじめな気持ちになり、自分を責め、早く寿命が来ないだろうかと思ってしまう。

私の場合は本を読む事で現実逃避をしたり、登場人物に自分を重ねて共感したりする事でなんとか生きているが、人間には話を聞いてくれる人、頼れる人が必要なのだと思う。

幸い、水越愛には市役所福祉課勤務の同級生がいて、相談にのってもらったり、仕事を紹介してもらったりして、新しい生活が始まる。

本のタイトルにある「神さま」とはこの同級生の事であるが、もう一人「神さま」がいて、それは水越愛以上に酷い家庭環境の中で育ち、体を売っている少女の事であった。水越愛は少女を救

う事で自分も救われるのだという。

私にはまだ誰かを救いたいと思う余裕はないが、そう思える人がいると生きる希望を持てるのかもしれない。

水越愛はこう考える。「生活をするために、お金は必要で、軽く考えない方がいい。けれど人生には、もっと大切なものがある。そのことを忘れてしまうと、お金も入ってこなくなる気がする。命を守るためのお金であり、お金を稼ぐために生きているわけじゃない」その通りだと思った。この本に出会えて、水越愛に出会えて本当に良かった。

この本を読んで思い出した事がある。私は若い頃約二年間外国に住んでいた。楽しい思い出がたくさんあるが、一度だけ辛い思いをした。ポンド詐欺にあい、お金を払ったのに住む所が急になくなったのだ。その時真っ先にかけてくれたのが某商社の部長だった。そして

「金は大丈夫か？金ならいくらでも貸すぞ。金が無いからって体売るような事は絶対にするなよ。」

と喋ってくれた。私は泣きそうになった。他の商社勤務の男性も奥さんを説得して自宅の一部屋空けたので、その部屋にすんでもいいと言ってくれた。友人達も

「うちのリビングに住まない？」

と言ってくれた。身内が一人もない外国で私を心配してくれ、助けようとしてくれた人達がいた事は大変ありがたく幸せな事だった。

自分自身にも、水越愛のような経験をしている人達にも言いたい。

「裕福でなくてもいい。なんとかかなるから、とりあえず生きてい

こう。」
と。

『神さまを待っている』 畑野智美／文藝春秋

〈入選〉

君に伝えたいことがある

成 田 八千代

一月二日、午前八時。東京箱根往復大学駅伝競走は、東京大手町にある読売新聞本社ビル前をスタートする。寛政大学の黒と銀のユニフォームを身に付けた走者は、柏崎茜。アパートの室内に天井近くまでぎつしりと漫画が積まれ、布団を敷くスペースがないため、毛布にくるまって寝る漫画オタク。走ることのない生活を送っていたのに、「漫画を捨てるか、ともに箱根駅伝を目指すか、どっちがいい？」と清瀬に脅され、まきこまれたのだ。

清瀬灰二は陸上選手だったが、高校の時の膝の故障のため、駅伝の名門である六道大学の推薦を断り、一般入試で寛政大学に入った。大学から徒歩五分の「竹青荘」に住みながら箱根駅伝出場を狙っていた。万引をして逃げる蔵原走の走りに目を奪われ、彼を「竹青荘」に招き入れたことから、彼の野望は動き始める。これまでの住人たちも知らなかったが、「竹青荘」は寛政大学陸上競技部錬成所で、大家の田崎源一郎が監督だという。

一〇二号室、岩倉雪彦は法学部四年。既に司法試験に合格した秀才。

一〇三号室、蔵原走は中学時代から走っていたが、高校陸上部で暴力事件を起こし、退部となる。寛政大社会学部一年生。

一〇四号室、平田彰宏は「ニコチャン」というあだ名で呼ばれ、陸上経験はあるが二浪と留年で二十五歳のヘビースモーカー。

二〇一号室は、双子の城太郎と城次郎の一年生。高校時代はサッカー部。

二〇二号室の坂口洋平は社会学部四年。ビデオに録画してまでクイズ番組を見るキング。

二〇三号室のムサ・カマラは理工学部二年のアフリカ出身の留学生。陸上とは無関係。

二〇五号室、杉山高志は商学部三年。田舎では「神童」と呼ばれたが今は普通。

二〇四号室が「王子」こと柏崎茜、一〇一号室が清瀬灰二で朝晩の食事を作り、住人たちの健康管理をしている。文学部四年で大学最後の箱根にかけている。

清瀬の言葉は人をひきつける。自分の暴力事件で高校時代のチームメイトを傷つけたと心を閉ざす走に対して告げた次のような言葉。

「過去や評判が走るんじゃない。いまのきみ自身が走るんだ。惑わされるな。振り向くな。もっと強くなれ」

「速くなれ」と言われることはあっても「強くなれ」と言われたのは初めて。凍りついた心に火が灯ったように感じて走り出す。そして彼だけではなく、ほとんど共通点もないメンバーが、十人で箱根をめざすチームになっていく。

最も印象に残ったのは「走る意味」をそれぞれが考える過程だ。柏崎は、練習初日、五千メートルのタイムは三十三分十三秒十三

であつた。予選会出場の十七分以内には気の遠くなるような努力が必要だ。

私は運動嫌いで持久走などはいかにサボるかを考えていた。高校の体育祭、午前中最後の種目は長根山をまわつて帰ってくる持久走だった。ほとんど歩き、ゴールした時に皆は既に昼食を終えていた。走つた疲労と吐き気で私はとても食事をとれなかった。さらに大変だったのは強歩大会。三十キロ以上もある行程に山をいくつもこえなければならぬ。途中で雨に降られたり、靴ずれで血まめが出来たり。関門で休むと立ち上がれないのではないかという気持ちになった。楽しそうに走って行く人たちが信じられなかった。

柏崎はなぜ努力し続けることができたのか。清瀬は「ひとつのことをコツコツ極めるのが苦にならない」漫画への情熱と持続力は長距離向きの性格だと褒めている。すぐ近くに自分をよく見て評価し、高みへ押し上げてくれる人がいたからではないか。また、彼らの姿を見て応援してくれる地元商店街の人たち、駅伝以外の陸上部のサポート。

「きみに伝えたいことがある。だから、這つてでも鶴見まで来い」

柏崎が十五キロ地点で監督車から聞いた清瀬からの伝言。自分の全力で走っていくしかない、諦めず、辛抱強く走り切る。そしてムサに襷を渡し、倒れ込むところを支えられながら聞いたのは「ここまで一緒に来てくれて、ありがとう」

という言葉だった。

私が鷹巣高校に勤務していたころ、陸上競技部の顧問にいたことがる。監督は長距離の専門家で、私は三番めの会計も兼

ねたサポート役だ。「選手のお母さんがわりをお願いしたい」と、当時の校長に頼まれたものの、「ゼリーを買っておいて」と言われ、果物ゼリーを人数分買ってしまいうくらい、陸上とは無縁の素人だった。それだけに、雪の中でも中央公園でタイムを測ったり、大会前には試走にでかけたり、日々地道な練習が繰り返されることを驚きとともに見守った。どうしてこんなに苦しい思いをしてまで走るのか。どうしてライバルも仲間も関係なく助けあえるのか。この小説から伝わってくる「強さ」。

ただ純粋に、ひたすら走る彼らから、風が強く吹いてくるのだ。

『風が強く吹いている』三浦しをん／新潮社

読書感想文講評

審査委員長 庄 司 美穂子

本を手にしたときのわくわくした気持ちは、誰にでも経験があるのではないだろうか。本の扉の向こうには、思いもよらない出会いがあり、自分の知らない世界が広がっています。

本を読むことの最大の魅力は、「疑似体験ができる」ことであり、経験していいことでも、それを力にして「想像力を豊かに育むことができる」と言われています。

現実にはない冒険や不思議の世界など、本に登場する主人公になりきり、自分と重ねて物語を読み進めることで、まるで本当に体験したかのような感動を得ることができます。

本のページをめくると、自分とは違う境遇で、いろいろな人生を生きてことができます。心が楽しく明るくなったり、また時には、悲しみや悔しさを味わったり。そのことで、いろいろな人の気持ちを考えられるようになったり、相手の気持ちを想像して優しい行動ができるようになったりするのがいいのです。

こうして、様々な世界や人生、価値観との出会いにより、広い視野で客観的に物事を捉えることができ、想像力を働かせてイメージする力や、じっくりと考える力が育まれます。本の世界を楽しみ、味わうことを積み重ねることにより、「想像する力」が培われ、感性を育むことにつながると言えます。

今年度は全部で四十五点の応募があり、昨年より二十点ほどの減少となりました。大館北秋田地区コンクールと開催時期が近く、

なかなか時間に余裕がない中、本コンクールに出品してくれたことに感謝いたします。また、御指導くださいました先生方、御家族の皆様、そして審査や作品集の発刊に御尽力くださいました多くの方々には深く感謝申し上げます。

応募された作品は、どれも、その本を読んで本当によかったという気持ちにあふれたものばかりでした。出会った一冊の本に正面から向き合い、本が広げてくれる世界を楽しみ、共感したり感動したり、そこから考えさせられたりしたことを、自分なりの言葉で素直に表現していました。今回応募いただいた作品の中で、特に印象に残ったのは、「読書を通じた気付きから、人との関わりをいろいろな視点から見つめることで、互いの理解を深めていく」と決意した作品でした。

読書感想文を書くことは、本と向き合い、自分自身と向き合うという貴重な時間となります。自分の考えをめぐらし、整理して相手にしっかりと伝えるためには、「言葉（語彙）をたくさんもつこと」が必要です。この「言葉の力」を養うことができるのが、「読書」です。

「読書への扉」は、どこにでもあります。そのきっかけをつくるのは、私たち大人の役割です。心の財産となるような本をできるだけ多く、子どもたちに出会わせたいものです。一人でも多くの子どもたちが本を愛し、読書の喜びや楽しさを味わってほしいと願っています。

次に、審査員の先生方の講評をまとめましたので、今後、読書感想文を書く際の参考にしてください。

◆小学校三年生の部

◎よかったところ

- ・本を読んで感じたことを、自分の言葉で表現することができていました。

- ・自分の生活や経験と結びつけて書くことができていました。

○今後のために

- ・その本の伝えたいメッセージについて深く考え、具体的に表現すると、思いが読み手に伝わりやすくなります。

◆小学校四年生の部

◎よかったところ

- ・本の主人公に共感し、自分の思ったことを自分の言葉で素直に表現していました。

○今後のために

- ・一つのテーマで、原稿用紙三枚の分量を書き切る力がほしいです。

- ・書き出しを工夫してみましょう。

◆小学校五年生の部

◎よかったところ

- ・学年の発達段階に合った本を選んでいます。
- ・規定の文字数を生かして、最後までしっかり書き切ろうとしていました。

- ・素直な思いを、自分の言葉で表現していました。

○今後のために

- ・原稿用紙の使い方では、かぎカッコや句読点の位置の誤り、ま

た、誤字・脱字などがあるため、出品する前に必ず確認しましょう。

- ・あらすじと自分の考えのバランスを大切にして書くことを心がけましょう。

◆小学校六年生の部

◎よかったところ

- ・自分の生活との関わりを考えながら、文章の中に生かそうとしていました。

- ・書き出しの工夫で、読み手を引きつけようとしていました。

- ・本から学んだことを今後に生かそうとする前向きな思いを感じました。

○今後のために

- ・感動した場面が伝わるように、構成を考え、原稿用紙三枚目の最後まで書き切る力をつけてほしいです。

■今回の「小学校の部」の審査において、今後の課題として、共通して話題になったことが二点ありました。

(1) 原稿用紙の正しい使い方についての指導が必要である。

(2) 規定の文字数を十分に生かした作品になるように指導したい。

(※応募規定の「文字数が一二〇〇字以内」の捉え方については、原稿用紙三枚目の最後の行まで(九割程度の分量)を目標に、書き切ることが大事です。分量が少ないと、書き手の思いを十分に表現することにつながりません。)

◆中学校

◎よかったところ

- ・作品の展開や人物の心情を捉え、自分の体験と照らし合わせながら、思いを述べていました。
- ・自分の内面やこれまでの生活を振り返り、分析することで、これからの自分のあり方を思索し、その思いを力強く書き上げていました。

・本との出会いや、読み進めることから感じた喜びや発見が生き生きと書かれていました。

○今後のために

- ・作品との出会いが、自分をどのように変えたのかを中心に述べるようにです。
- ・作品の内容説明に字数を多く取ってしまうと、自分の思いを述べる部分が少なくなりがちになるため、注意しましょう。
- ・登場人物と自分を照らし合わせ、自分の体験を通して実感したことを述べると、思いが伝わりやすくなります。

◆高校・一般

◎よかったところ

- ・読書の経験と、ご自身の人生経験を重ね、読み手に強い印象を与える感想文になっていました。

○今後のために

- ・本の引用、あらすじ、要約などの割合が大きいと感じました。自分の思ったこと、考えたことをより詳細に、具体的に伝えることを心がけましょう。

令和7年度 北秋田市読書感想文コンクール入賞者一覧

小学校3年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	佐藤 カンナ	綴子小学校	しつぱいにかんぱい！
入選	田崎 陽也	米内沢小学校	ぼくがまもる
入選	成田 乙葉	鷹巣小学校	おぼっちが教えてくれたこと
佳作	金田 蓮正	米内沢小学校	やさしいかえるくん
佳作	佐藤 柚和	鷹巣東小学校	友だち
佳作	櫻井 奏空	合川小学校	「ごめんね」を言うには

小学校4年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	三浦 歩夢	鷹巣小学校	ぼくが知らなかったゴミの話
入選	片岡 恵愛	阿仁学園	水族館の飼育員さんはすごい！
入選	近藤 彩蓮	米内沢小学校	みんななかよく
入選	米倉 道親	綴子小学校	勇気とやさしさのピザ
佳作	西村 蓮	清鷹小学校	あきらめないことが大事
佳作	堀内 日彩	綴子小学校	小さな命を守りたい
佳作	中嶋 珠寿	鷹巣小学校	私のくつ
佳作	塩崎 結羽	合川小学校	「ずるやすみ」は心の手当て？

小学校5年生の部

賞	氏名	学校名	題名
入選	羽場 大耀	米内沢小学校	「クジラと海とぼく」を読んで
佳作	赤木 暖	綴子小学校	お互いにわかり合うために
佳作	疋田 彩乃	合川小学校	戦後80年がたって

小学校6年生の部

賞	氏名	学校名	題名
入選	中嶋 真悠	清鷹小学校	少数派になる勇氣
佳作	高橋 來愛	綴子小学校	いのちをいただく
佳作	岩谷 絢	鷹巣東小学校	何気ない毎日に感謝して
佳作	成田 葵	合川小学校	困っている人を助けるために

中学校の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	堀内 希咲	鷹巣中学校	人を見つめたい
入選	佐藤 あおい	鷹巣中学校	「違い」が希望になる
入選	庄司 心優	鷹巣中学校	よりよい人生を送ること
入選	鈴木 萌生	鷹巣中学校	優しさの形
佳作	宮腰 栞来	鷹巣中学校	夢を叶えるために
佳作	成田 彩乃	鷹巣中学校	支えになる行動を

高校・一般の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	成田 洋子	一般	「神さまを待っている」を読んで
入選	成田 八千代	一般	君に伝えたいことがある
佳作	田中 秀子	一般	地獄を考える

令和7年度 北秋田市読書感想画コンクール入賞者一覧

保育園・認定こども園の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	佐藤 彩	前田保育園	わたしのおしろであそびましょう！
入選	上杉 茉白	阿仁合保育園	にんじんろけつとにのつてしゅっぱーつ！
入選	柳谷 奏汰	前田保育園	うわあー！ おつきいなあー
入選	齊藤 悠真	米内沢保育園	うみのなかにいってみたいな
入選	北林 佑翔	米内沢保育園	パパのうんでんみんなでおうえんしているよ
佳作	佐藤 蒼虎	鷹巣中央保育園	えきにとうちやく
佳作	畠山 茉優	綴子保育園	そらをとびたいな！
佳作	兎澤 薫	南鷹巣保育園	はなびたのしそ
佳作	松尾 奏壱	鷹巣東保育園	こんちゅうだいすき
佳作	鈴木 柊也	阿仁合保育園	ぼくのいえは、うちゅうの110かいだて!!
佳作	安藤 一真	米内沢保育園	おうちからはたらくるまがたくさんみえたよ

小学校1年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	成田 陽斗	綴子小学校	ライオンのカラフルなせかい
入選	細貝 在	阿仁学園	クリームソーダにはいった しろくまちゃん
入選	吉田 琥翔	米内沢小学校	あさがおとあそぼう
入選	藤嶋 桃々	清鷹小学校	チリンのおたんじょうびかい
入選	松橋 雫	鷹巣小学校	ふしぎなもりにあるおかしのいえ
佳作	庄司 悠	米内沢小学校	あさがおとわたし
佳作	福原 朱織	清鷹小学校	おたんじょうびパーティー
佳作	小塚 響斗	鷹巣小学校	きよだいたいこんのむら
佳作	工藤 優月	鷹巣小学校	やどかりのパーティー
佳作	吉田 唯亜	合川小学校	ながあいバナナのすべりだいであそぼう

小学校2年生の部

賞	氏名	学校名	題名
入選	石川 心絆	清鷹小学校	ぼうしやさんから かえってきたよ
入選	近藤 心来	鷹巣小学校	魚たちとあそんだよ
佳作	若松 詠樹	米内沢小学校	にぎやかな海の中
佳作	赤石 湊真	鷹巣東小学校	やさいがいっぱい おいしいごはん
佳作	西村 藍心	清鷹小学校	ぼうしやさんから かえってきた わくわくのみんな
佳作	コリガン 琉生	鷹巣小学校	3人で楽しもう
佳作	佐藤 心陽	鷹巣小学校	みんなであそぼう
佳作	水戸 帆華	鷹巣小学校	みんなの大きな木
佳作	石田 惺羅	合川小学校	新しい家ができたよ

応募された方々〈感想文〉

小学校3年生

金田 蓮正（米内沢小）	田崎 陽也（米内沢小）	佐藤カンナ（綴子小）	佐藤 柚和（鷹巣東小）	成田 乙葉（鷹巣小）
櫻井 奏空（合川小）				

小学校4年生

片岡 恵愛（阿仁学園）	柏木 紅葉（阿仁学園）	鈴木 空翔（米内沢小）	近藤 彩蓮（米内沢小）	池田 奏冴（清鷹小）
西村 蓮（清鷹小）	伊東 青羽（清鷹小）	近藤 柑奈（清鷹小）	簾内姫優花（清鷹小）	田代 咲（清鷹小）
出川 翔誠（綴子小）	柏木 圭哉（綴子小）	米倉 道親（綴子小）	堀内 日彩（綴子小）	三浦 歩夢（鷹巣小）
中嶋 珠寿（鷹巣小）	塩崎 結羽（合川小）			

小学校5年生

武石 朝輝（米内沢小）	羽場 大耀（米内沢小）	赤木 暖（綴子小）	疋田 彩乃（合川小）
-------------	-------------	-----------	------------

小学校6年生

中嶋 真悠（清鷹小）	佐藤 翔太（綴子小）	高橋 勇登（綴子小）	三澤 光河（綴子小）	高橋 來愛（綴子小）
堀内奈津葵（綴子小）	岩谷 絢（鷹巣東小）	鈴木ひまり（鷹巣東小）	成田 葵（合川小）	

中学校

鈴木 萌生（鷹巣中）	堀内 希咲（鷹巣中）	佐藤あおい（鷹巣中）	宮腰 栞來（鷹巣中）	庄司 心優（鷹巣中）
成田 彩乃（鷹巣中）				

高校・一般

成田 洋子（一般）	田中 秀子（一般）	成田八千代（一般）
-----------	-----------	-----------

応募された方々〈感想画〉

保育園・認定こども園

佐藤 梨紗 (鷹巣中央保)	成田 煌 (綴子保)	木村 結愛 (鷹巣東保)	高橋 樹 (しやろーむ)
高橋 望来 (鷹巣中央保)	藤嶋 柊馬 (綴子保)	木村香乃華 (あいかわ保)	高橋 結奈 (しやろーむ)
林 暖大 (鷹巣中央保)	九嶋亜衣奈 (綴子保)	金 悠愛 (あいかわ保)	武内 栄子 (しやろーむ)
白根 颯斗 (鷹巣中央保)	長谷川鳳海 (綴子保)	櫻田 心晴 (あいかわ保)	武田 一華 (しやろーむ)
泉谷 杏 (鷹巣中央保)	小峰 葉生 (南鷹巣保)	佐藤 香帆 (あいかわ保)	田村 陽大 (しやろーむ)
津谷 海稜 (鷹巣中央保)	布田 凜 (南鷹巣保)	佐藤 洋人 (あいかわ保)	津谷 泉杜 (しやろーむ)
藤田 彩愛 (鷹巣中央保)	武石莉乃愛 (南鷹巣保)	松岡 悠柊 (あいかわ保)	照内 叶和 (しやろーむ)
春日 丈亮 (鷹巣中央保)	兎澤 薫 (南鷹巣保)	小野 愛梨 (あいかわ保)	永井 実莉 (しやろーむ)
浅田 玲 (鷹巣中央保)	柴田 心晴 (南鷹巣保)	金田 美穂 (あいかわ保)	畠山 暖 (しやろーむ)
佐藤 蒼虎 (鷹巣中央保)	笠松ひなた (南鷹巣保)	佐藤 翼 (あいかわ保)	山形屋拓実 (しやろーむ)
藤田望乃彩 (鷹巣中央保)	畠山 朔 (南鷹巣保)	戸嶋 勇斗 (あいかわ保)	山岸 楓 (しやろーむ)
武田 咲良 (鷹巣中央保)	工藤 楓麻 (南鷹巣保)	畠山 茅咲 (あいかわ保)	鈴木 柊也 (阿仁合保)
津谷 椿 (鷹巣中央保)	藤本 桃寧 (南鷹巣保)	藤嶋 真帆 (あいかわ保)	上杉 茉白 (阿仁合保)
春日 陽愛 (鷹巣中央保)	佐々木 樹 (南鷹巣保)	伊東 麗朱 (しやろーむ)	柳谷 奏汰 (前田保)
金 楓 (鷹巣中央保)	櫻田 桐生 (南鷹巣保)	五代儀ひので (しやろーむ)	佐藤 彩 (前田保)
嶺脇 碧 (鷹巣中央保)	米澤 香帆 (南鷹巣保)	片岡 里渚 (しやろーむ)	近藤 琉人 (七日市保)
伊東 柊華 (綴子保)	松屋 千優 (南鷹巣保)	木村麟太楼 (しやろーむ)	岩谷 百合 (七日市保)
浪岡 愛乃 (綴子保)	碓谷 飛月 (鷹巣東保)	久保田ゆあ (しやろーむ)	齊藤 悠真 (米内沢保)
熊谷 奏祐 (綴子保)	日下部優来 (鷹巣東保)	櫻田 杏 (しやろーむ)	九嶋 煌 (米内沢保)
小松 悠月 (綴子保)	柳谷 恵麻 (鷹巣東保)	佐藤 彩羽 (しやろーむ)	三浦 萌詩 (米内沢保)
佐藤 宏太 (綴子保)	畠山 依那 (鷹巣東保)	佐藤 希幸 (しやろーむ)	信太 結菜 (米内沢保)
畠山 茉優 (綴子保)	松尾 奏壱 (鷹巣東保)	佐藤 壮真 (しやろーむ)	安藤 一真 (米内沢保)
米沢 栂 (綴子保)	三浦 心詩 (鷹巣東保)	澤田 桜来 (しやろーむ)	武石 音咲 (米内沢保)

北林 佑翔 (米内沢保)

小学校1年生

高橋 椿	(阿仁学園)	藤原 桃子	(鷹巣東小)	出川 瑞葵	(綴子小)	佐藤愛依音	(鷹巣小)	金 悠真	(合川小)
細貝 在	(阿仁学園)	吉田俐輝斗	(鷹巣東小)	北林 紬	(綴子小)	高橋 彩七	(鷹巣小)	近藤 斗真	(合川小)
宮野 夏帆	(阿仁学園)	清水 蘭	(鷹巣東小)	成田 陽斗	(綴子小)	津谷日向葵	(鷹巣小)	齊藤 茜空	(合川小)
柏木 結衣	(米内沢小)	杉原 吏音	(鷹巣東小)	村上 晴	(綴子小)	花田 美月	(鷹巣小)	佐々木愛唯	(合川小)
北野 礼珠	(米内沢小)	藤原 小華	(鷹巣東小)	金田 琴都	(綴子小)	加藤 結大	(鷹巣小)	佐藤 知颯	(合川小)
庄司 琴愛	(米内沢小)	中嶋 忞心	(鷹巣東小)	河田天麻美	(綴子小)	北林 琉登	(鷹巣小)	澤藤 愛菜	(合川小)
久留島瑠空	(米内沢小)	岩本 颯汰	(清鷹小)	佐藤 璃音	(綴子小)	齊藤 海理	(鷹巣小)	杉刈 陽心	(合川小)
吉田 琥翔	(米内沢小)	岩本 悠悟	(清鷹小)	高橋 一華	(綴子小)	佐藤 遥	(鷹巣小)	土濃塚樹月	(合川小)
庄司 悠	(米内沢小)	久留嶋陽翔	(清鷹小)	高橋 咲衣	(綴子小)	田口 慈貴	(鷹巣小)	藤嶋 向晴	(合川小)
若松 夢咲	(米内沢小)	佐藤 優真	(清鷹小)	田村 莉子	(綴子小)	中嶋 瑛汰	(鷹巣小)	藤田 紗希	(合川小)
加賀 朱莉	(米内沢小)	高堰 暖人	(清鷹小)	藤島 叶愛	(綴子小)	中田 蓮人	(鷹巣小)	松岡 鳳介	(合川小)
庄司 知咲	(米内沢小)	成田 康輝	(清鷹小)	淡路 彪翔	(鷹巣小)	藤谷 羽遼	(鷹巣小)	湊 耀太	(合川小)
柏木 陽向	(米内沢小)	松橋 導和	(清鷹小)	井上 絢刻	(鷹巣小)	古田 澄晴	(鷹巣小)	吉田 唯亜	(合川小)
板垣 希	(米内沢小)	松橋 由和	(清鷹小)	片岡 真寛	(鷹巣小)	細川 湊翔	(鷹巣小)		
松岡 歩也	(米内沢小)	植村 めい	(清鷹小)	熊谷 匠真	(鷹巣小)	織山 榮乃音	(鷹巣小)		
若松 ゆら	(米内沢小)	佐藤 灯	(清鷹小)	小坂 海仁	(鷹巣小)	木村 もも	(鷹巣小)		
佐藤 天馬	(米内沢小)	佐藤 有咲	(清鷹小)	小塚 響斗	(鷹巣小)	澤田 明咲	(鷹巣小)		
柴田 岳	(米内沢小)	佐藤 和	(清鷹小)	近藤 創介	(鷹巣小)	田中 愛乃	(鷹巣小)		
多賀谷理央	(米内沢小)	武石 滢	(清鷹小)	佐藤 壮	(鷹巣小)	仲谷 和泉	(鷹巣小)		
岩川 天星	(鷹巣東小)	千葉 琴葉	(清鷹小)	西根 海翔	(鷹巣小)	奈良 樹那	(鷹巣小)		
岩谷 千代	(鷹巣東小)	中嶋 彩月	(清鷹小)	松橋虎汰郎	(鷹巣小)	松橋 雫	(鷹巣小)		
佐々木 新	(鷹巣東小)	中嶋美古都	(清鷹小)	五代儀ひまり	(鷹巣小)	伊藤 大貴	(合川小)		
鈴木 さや	(鷹巣東小)	福原 朱織	(清鷹小)	春日 梓葵	(鷹巣小)	伊東 虹空	(合川小)		
成田 栄渚	(鷹巣東小)	藤嶋 桃々	(清鷹小)	九嶋ひかり	(鷹巣小)	小笠原風音	(合川小)		
福原 凌	(鷹巣東小)	中嶋 柊斗	(清鷹小)	工藤 優月	(鷹巣小)	金田明日馬	(合川小)		

小学校2年生

上杉 七瀬 (阿仁学園)	倉内日加里 (清鷹小)	五代儀篤実 (鷹巣小)	河田 禅 (鷹巣小)	櫻田 環太 (合川小)
船橋 栖立 (阿仁学園)	小塚 朝陽 (清鷹小)	小笠原昊希 (鷹巣小)	小塚洋次郎 (鷹巣小)	櫻庭 唯斗 (合川小)
森川 彩愛 (米内沢小)	佐々木碧工 (清鷹小)	コリガン泰良 (鷹巣小)	コリガン琉生 (鷹巣小)	佐藤 琴 (合川小)
木村 朔 (米内沢小)	佐藤 悠斗 (清鷹小)	桜庭 詠多 (鷹巣小)	津谷 航成 (鷹巣小)	佐藤慎之助 (合川小)
岸野 礼佳 (米内沢小)	千葉康太郎 (清鷹小)	佐藤 琉心 (鷹巣小)	戸沢 敬晴 (鷹巣小)	杉渕由衣乃 (合川小)
松橋 玄 (米内沢小)	千葉 空 (清鷹小)	佐藤 龍陽 (鷹巣小)	畠山 開誠 (鷹巣小)	関 隆翔 (合川小)
森川 瑛斗 (米内沢小)	中嶋 湊人 (清鷹小)	澤野 大和 (鷹巣小)	畠山 蒼風 (鷹巣小)	瀬下 涼翔 (合川小)
若松 詠樹 (米内沢小)	奈良 一生 (清鷹小)	白根 悠陽 (鷹巣小)	畠山 大輝 (鷹巣小)	新田 優斗 (合川小)
米澤 叶奈 (米内沢小)	吉田 惺愛 (清鷹小)	田山 葉王 (鷹巣小)	畠山 大嗣 (鷹巣小)	松岡 桧生 (合川小)
新林 叶偉 (米内沢小)	石川 心絆 (清鷹小)	永井 大雅 (鷹巣小)	藤島 聖 (鷹巣小)	
高杉 真礼 (米内沢小)	尾山 莉麻 (清鷹小)	成田 有佑 (鷹巣小)	三上 虹平 (鷹巣小)	
相沢 彩葉 (鷹巣東小)	工藤 陽葵 (清鷹小)	長谷川琳一 (鷹巣小)	三沢 太輝 (鷹巣小)	
赤石 湊真 (鷹巣東小)	佐藤 朱莉 (清鷹小)	藤島 宏成 (鷹巣小)	村田 進至 (鷹巣小)	
赤石 大和 (鷹巣東小)	柴田 葉 (清鷹小)	三國 類 (鷹巣小)	木越 梨花 (鷹巣小)	
五代儀つぐみ (鷹巣東小)	千葉 侑奈 (清鷹小)	春日 琉愛 (鷹巣小)	工藤 吏桜 (鷹巣小)	
岩谷 昊 (鷹巣東小)	西村 藍心 (清鷹小)	小坂 美朝 (鷹巣小)	近藤 心来 (鷹巣小)	
岩谷 柚槻 (鷹巣東小)	花田 愛果 (清鷹小)	小林みくり (鷹巣小)	佐藤 心陽 (鷹巣小)	
佐藤あかり (鷹巣東小)	横町 蓮 (清鷹小)	近藤 桜 (鷹巣小)	佐藤 由芽 (鷹巣小)	
田村 雪空 (鷹巣東小)	大友 望愛 (清鷹小)	佐藤 滢 (鷹巣小)	杉渕 叶珠 (鷹巣小)	
チュウ ジョセフ (鷹巣東小)	佐藤 大翔 (綴子小)	成田 凜 (鷹巣小)	成田 蘭 (鷹巣小)	
照内 颯志 (鷹巣東小)	畠山 愛翔 (綴子小)	藤本 怜 (鷹巣小)	水戸 帆華 (鷹巣小)	
長谷川瑠海 (鷹巣東小)	三沢 怜央 (綴子小)	三沢凜桜奈 (鷹巣小)	石田 惺羅 (合川小)	
木村 朔夜 (鷹巣東小)	岩谷 明莉 (綴子小)	嶺脇 明穂 (鷹巣小)	石橋 莉子 (合川小)	
木村 桃李 (鷹巣東小)	羽澤 瑚音 (綴子小)	伊東 彩斗 (鷹巣小)	小嶋 絆立 (合川小)	
	相原 颯太 (鷹巣小)	五代儀笑那斗 (鷹巣小)	櫻井 望央 (合川小)	

令和 7 年度 応募者数及び入賞者数一覧

《 読書感想文 》

部 門		応募者	特 選	入 選	佳 作	入賞者計
小学校 3 年生の部		6	1	2	3	6
小学校 4 年生の部		17	1	3	4	8
小学校 5 年生の部		4	0	1	2	3
小学校 6 年生の部		9	0	1	3	4
中学校の部		6	1	3	2	6
中学校の部 学年別内訳 (全学年で1部門)	1 年生	4	1	2	1	4
	2 年生	0	0	0	0	0
	3 年生	2	0	1	1	2
高校・一般の部		3	1	1	1	3
合 計		45	4	11	15	30

《 読書感想画 》

部 門	応募者	特 選	入 選	佳 作	入賞者計
保育園・認定こども園の部	93	1	4	6	11
小学校 1 年生の部	113	1	4	5	10
小学校 2 年生の部	108	0	2	7	9
合 計	314	2	10	18	30

《 読書感想文・読書感想画の合計 》

部 門	応募者	特 選	入 選	佳 作	入賞者計
読 書 感 想 文	45	4	11	15	30
読 書 感 想 画	314	2	10	18	30
合 計	359	6	21	33	60

< 読書感想文・読書感想画コンクールの歴史 >

昭和 4 0 年度～第 1 回鷹巣町読書感想文コンクール

平成 9 年度～第 1 回鷹巣町読書感想画コンクール

※昭和 4 0 年度～平成 1 6 年度まで

鷹巣町読書感想文コンクール 通算 第 4 0 回

鷹巣町読書感想画コンクール 通算 第 8 回

※北秋田市（4 町合併後）

平成 1 7 年度 北秋田市読書感想文・読書感想画コンクール（第 1 回）

）

令和 7 年度 北秋田市読書感想文・読書感想画コンクール（第 2 1 回）

通算 感想文 第 6 1 回

感想画 第 2 9 回

滑川道夫 先生の題字「読書のあとで」は第 8 回から受け継がれている

令和 7 年11月
北秋田市教育委員会